

子どもに夢を与える人形たちの城

## こども人形劇場「こぐま座」

こぐま座の歩みを、北海道人形劇協議会代表の  
加藤博さん（人形劇団ひよっこ）のお話などを  
とに紹介します。

こぐま座は、板垣武四元市長がミュンヘンにある市立人形劇場や小屋がけの人形芝居を見て、札幌にも夢のある施設を造ろうと発案。昭和五十一年七月二十四日に全国初の公立人形劇場としてオープンしました。建設は、子どもたちの夏休みに間に合わせるために、着工から完成までわずか七十四日という異例の早さで進められました。オープン直前には、猛暑のため館内の温度が四十度にもなり、あわてて冷房機を取り付けるとい一幕もあつたそうです。

こうして完成したこぐま座は、子どもたちのための施設という目的以外に、人形劇団の育成という大切な役割も果たしてきました。劇団の人たちが好きな時に好きなだけ練習できるように常時無料で開放し、劇団が腰を据えて人形劇に取り組む拠点を提供



こども人形劇場「こぐま座」(中島公園内)

したのです。このため利用する劇団は、こぐま座を「市民から預かった自分たちの城」として、伸び伸びと練習に取り組むことができました。

人形作りなどの作業には、併設している中島児童会館の工作室を利用しました。劇団員が作業をしていると、児童会館を利用している子どもたちがのぞきに來ることもあったそうです。そのうち、人形劇に興味を示した子どもたちが劇団員の指導を受けるようになり、人形劇クラブを結成。こぐま座の舞台で人形劇を披露することもありました。

また、こぐま座では、人形劇の担い手を育成するために人形劇教室を開催し、この教室への参加をきっかけに多くのアマチュア劇団が生まれました。そして現在、これらの劇団が札幌の人形劇を支えています。

平成十七年、こぐま座はオープンから三十年目に入りました。オープンしたころ人形劇を楽しんでいた子どもたちが成長し、今では小さな子どもの手を引いてやって來ます。昔も今も変わることなく、こぐま座は子どもたちに夢を与え続けています。

(平成十二年五月号・第六十七回)